

本発表では、スタンリー・カヴェルの『理性の呼び声』における第三章の読解を中心に据え、その章で与えられている道徳的なものの特徴づけを確認し、さらにその議論を動機づけている根本的な着想が、彼の後の思索へどのように受け継がれていったのかを明らかにすることを目的とする。

カヴェルの倫理的議論における立場は、おおよそ次のように整理できる。すなわち彼は一方では、ある道徳的判断とそれを裏づける根拠とのあいだにある、帰納的でも演繹的でもない結びつきの合理性を明らかにしようとする。他方で彼は、道徳を常に拒絶に開かれたものとして、また共同体の内部で生じる他者と個人との軋轢を和らげるための、一つの相対化された手段として捉え直すのである。その手段は単なる方便にとどまらず、共生にとってはきわめて重要な意味を担っているが、こうした立場から、カヴェルは道徳的なものの権限には制限があることを論じ、こうした制限を二つの水準で際立たせる。すなわち、道徳そのものが拒絶にさらされるという根源的な可能性の水準と、道徳にコミットする者どうしの議論であっても合理的にしてなお一致し得ない場合があるという日常的な可能性の水準である。この二つの水準がどのように連動しうるかということも本発表の関心事である。

発表の構成は次のとおりである。第一に、日常的な知識主張に対する認識論的吟味と、道徳的主張に対する吟味とを比較する。日常の文脈で知識主張が吟味にさらされる場合、たとえば「なぜそうだとわかるのか」と問われるとき、焦点となるのは言われた内容が事実としてそのとおりかどうかであり、その問いに答えるのに十分な程度、弁者の立ち位置やそこから投げられる根拠が求められる。これに対して道徳的主張が吟味にさらされる場合、たとえば「なぜそんなことを言うのか」「何を言っているのか本当にわかっているのか」と問われるとき、焦点となるのは主張内容そのものの事実性ではない。その問いが求めているのはむしろ、弁者が自身の責任を引き受けているとみなす立ち位置の明確化であり、その立ち位置と彼の主張とが本当に適切に結びついているかどうかということに関する応答である。第二に、この相違を踏まえつつ、彼がスティーヴンソンやロールズに向けた批判の要点を検討する。ここでの論点は、道徳的な立ち位置や根拠には何が含まれていなければならないのか、そして道徳的議論が制度やルールへの訴えによって決着するのはどのような場合であり、またそうでないのはどのような場合なのか、という点である。こうした議論を深めることで、道徳的なものが拒絶に開かれているにもかかわらず、なおもある道徳的主張と、その責任が負われるところの立ち位置や根拠の関係が適切であるかどうかの基準が存在するという事情の一端が解明されるだろう。最後に、ここで練り上げられた思考が彼の後年の「道徳的完成主義」に関する議論や、オースティン解釈へどのように反映されていったのかを検討することで、本発表の考察を閉じたい。